



平成 29 年度 文化庁委託事業 劇場・音楽堂等基盤整備事業

地域別 技術職員研修会

■ ■ ■ ■ 報告書 ■ ■ ■ ■

公益社団法人全国公立文化施設協会



地域別劇場・音楽堂等技術職員研修会一覧

地域別	日 程	実施会場	内 容	参加者数・施設数
北海道	アートマネジメント研修会合同開催 平成29年 11月15日(水) ～11月17日(金)	北海道立道民活動センター (かでの2・7)	1「劇場・ホールとは」 2「施設運営とは」 3「劇場・ホールの事業とは」 4「劇場空間とは」 5「舞台設備とは」 6 オペラ本番実技 7「舞台における事故防止対策」 8「危機管理マニュアルの作成について」	34名 17施設
東北	平成29年 9月19日(火) ～9月20日(水)	日立システムズホール仙台	1「これからの劇場・音楽堂等に望まれる改修の考え方」 2「舞台監督とホール管理技術者」綱元の実技研修 3「劇場・音楽堂の管理運営における危機管理について」	54名 37施設
関東甲信越静	平成29年 12月6日(水) ～12月7日(木)	ホクト文化ホール(長野県県民文化会館)	1「舞台技術者の人材育成と求められる役割について」 2「舞台音響設備の改修について」～実際の事例から～ 3(舞台音響設備の最近の動向)「舞台音響で活用されているツールについて」 4「各社音響ミキサーを中心とした操作体験」	51名 28施設
東海北陸	平成30年 1月18日(木) ～1月19日(金)	瑞浪市総合文化センター	1「日本舞踊の舞台の作り方」 2「技術職員から見る大規模改修工事」 3「事例紹介とパネルディスカッション」	48名 25施設
近畿	アートマネジメント研修会合同開催 平成30年 2月1日(木) ～2月2日(金)	神戸市立灘区民ホール	1「高所作業における取組・現状・注意点」 2「高所作業における実践編」 3「文化庁、京都への移転 これから」 4「公共ホールにおける良いコンサートを創るための条件」 5「公共ホールにおけるコンサートの役割」 6「ホールの特性を活かした音響ミキシングによるジャズ音楽のアンサンブル」	38名 18施設
中四国	平成30年 1月18日(木) ～1月19日(金)	島根県芸術文化センター「グラントワ」いわみ芸術劇場	1「舞台機構の安全管理について」 2「照明業務の安全管理について」 3「音響業務の安全管理について」 4「危険リスクに関する討論会」	37名 24施設
九州	平成29年 11月28日(火) ～11月29日(水)	鹿児島県文化センター(宝山ホール)	1 平成26年度劇場・音楽堂等人材養成講座テキスト基礎編より「第4章 劇場空間とは」 2 平成26年度劇場・音楽堂等人材養成講座テキスト基礎編より「第5章 舞台設備と」 3「公立文化施設の危機管理」～自然災害、事故防止、テロ対策～	46名 28施設

平成 29 年度文化庁委託事業
北海道地域アートマネジメント・技術職員研修会実施報告

開催概要

事業名	平成 29 年度北海道地域アートマネジメント・技術職員研修会
趣旨	劇場音楽堂等の活性化に関する法律の制定及び同法に基づく指針の制定を受け、劇場・音楽堂等の活性化を図るため、公演等企画制作、舞台関係の施設・設備の運用、組織事業の管理運営等、劇場・音楽堂等に必要なノウハウやスキルをもった人材の養成を行うことが一層求められていることから、劇場・音楽堂等に勤務する職員等を対象に、劇場・音楽堂等の運営に必要な基礎及び専門能力の養成を行い、劇場・音楽堂等の運営基盤の充実と活性化に資する。
開催期間	平成 29 年 11 月 15 日（水）～ 11 月 17 日（金）
会場	北海道立道民活動センター（かでの 2・7） 〒060-0002 北海道札幌市中央区北 2 条西 7 丁目
担当施設	北海道立道民活動センター（かでの 2・7）
参加人数	34 名（参加施設 17 施設）

研修計画・日程

	日時	内容	講師等
11/15 (水)	13:30~13:40	開講式	
	13:40~15:00	講義 1「劇場・音楽堂等人材養成講座テキスト」 第 1 章「劇場・ホールとは」	講師 柴田英杞氏（(公社) 全国公立文化施設協会アドバイザー）
	15:00~15:10	休憩	
	15:10~16:30	講義 2「劇場・音楽堂等人材養成講座テキスト」 第 2 章「施設運営とは」	講師 間瀬勝一氏（(公社) 全国公立文化施設協会アドバイザー）
	16:30~16:40	休憩	
	16:40~18:00	講義 3「劇場・音楽堂等人材養成講座テキスト」 第 3 章「劇場・ホールの事業とは」	講師 間瀬勝一氏 柴田英杞氏
	18:30~	情報交換会	
11/16 (木)	9:30~10:50	講義 4 及び実技「劇場・音楽堂等人材養成講座テキスト」 第 4 章「劇場空間とは」	講師 山形等氏（(一社) 日本劇場技術者連盟顧問）
	10:50~11:00	休憩	児山徹氏（帯広市民文化ホール）

	11:00~16:10 ※休憩 12:20~13:20 14:40~14:50	講義5及び実技「劇場・音楽堂等人材養成講座テキスト」 第5章「舞台設備とは」	舞台技術係係長 夷徳男氏（札幌北海道共立ホール 舞台技術係係長） 吉田仁志氏（音響家協会講師）
	16:10~16:20	休憩	
	16:20~17:30	講義6 オペラ本番実技	オペラ出演 accie(アッチェ)
11/17 (金)	9:30~10:30	講義7「舞台における事故防止対策」	講師 山形等氏 児山徹氏 夷石徳男氏 吉田仁志氏
	10:30~10:40	休憩	
	10:40~11:50	講義8「危機管理マニュアルの作成について」	講師 間瀬勝一氏
	11:50~12:00	閉講式	



挨拶



会場風景

研修会記録

1 はじめに

北海道地域ではアートマネジメント研修と技術職員研修を合同で3日間の日程で実施した。「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」及び同法に基づく「指針」に謳われているように、人材の専門的な能力の開発の向上が求められている中、基礎的な素養の習得を目的とした。

講義は「平成26年度劇場・音楽堂等人材養成講座テキスト基礎編」に沿って行うものとし、今後の地域内での講師人材の確保を見据え、技術系講師は道内から選出した。

またオペラの実技研修では北海道地域で活動している accie(アッチェ)を招き模擬公演を実施した。

2 研修内容

講義1「劇場・ホールとは」

講師：柴田英杞（公社）全国公立文化施設協会アドバイザー

劇場・ホールは社会や国にとってどんな意義があるのかを参加者の意見を交えながらディスカッションした上で、文化芸術振興だけではなく、新しい広場としての在り方や、まちづくりや地域活性化の核として大きな役割を担うべきであるということが、劇場・ホールに課せられている。

更に、あくまでも、「事業」というものは、それを達成するための手段であることを意識すべきとした。

文化芸術基本法、劇場法、指定管理者制度、条例等の制度的な視点から劇場・ホールを見つめ直した後、公会堂からスタートしたその歴史を振り返り、「集会機能型」から「上演機能型」の施設へシフトしてきている。

また、公立の劇場・ホールの役割と使命について、施設が目指すべき「目的」を

- ① 本質的価値（文化芸術振興、地域文化振興）
- ② 社会的価値（社会包摂活動…社会的議題を解決する）
- ③ 経済的価値（地域活性化、シティセールス）

の3つに分類した。それらを果たすべき行動規範を「使命」（ミッション）とし、運営に関わるメンバー全員が共有し、実現に向かって取り組むことが必要であり、プロモーターと異なる点でもあるとした。そのためには、「誰に」「何を提供するのか」「それによって、何が達成されるのか」「そのために、施設はどういった特徴をもたせるのか」を具体的に示す必要があるとし、随時見直しつつ、時代の変化に合わせていかなければならないとした。

講義2「施設運営とは」

講師：間瀬勝一（公社）全国公立文化施設協会アドバイザー

今回使用しているテキストは施設運営の基礎的な要素として知っていてほしい内容をまとめたものである。文化振興を仕事として市民に接する方は、ぜひ習熟して欲しいものであるとし、例としてコンビニエンスストアのアルバイト店員が自店の商品について、どこに何があるかの確に回答できるのに対し、ホール職員が舞台設備に関しての問合せにほとんど答えられない事例を挙げ、最低限テキストにある内容は頭に入れておく必要があると強調された。

・業務と組織について

- ① 公立の劇場・ホールの利用料金は、公的資金を投入して運営を成立させていることから、一般の劇場やホールに比べて安い。
- ② 公共的な劇場・ホールは地域の財産であることから、多くの人に利用してもらうための地域文化施設として、施設や設備、サービスに至るまで常に最良の状態を保たなければならない。それは集客にも大きく影響してくることが考えられる。
- ③ 劇場・ホールの運営組織の形態として館長の下に設備管理等を担う管理部門と受付や舞台運営などの事業部門を配置することが一般的である。

- ④事業を積極的に展開するために広報・営業に特化した部門を設けるべきだと考える。
- ⑤劇場・ホールの設備は基本的にはオーダー品で構成されていることから、専門知識と経験をもった人員を配置し、質の高い管理運営を利用者に継続的に提供することが求められている。

・財源と収支について

- ①維持管理費が支出の多くを占めており、地域の劇場・ホールにおいて運営費削減や人件費の削減傾向が強まってきているなかで、多様な自主財源の確保が必要である。
- ②助成金獲得のための4つのポイントとして、まず、誰のため、何のための事業か明確にすること、2つ目に補助、助成制度の趣旨目的を理解すること、3つ目に応募書類は別の職員に読んでもらうこと、最後に積算、会計処理を適正に示すことが肝要である。

・公立の劇場・ホールにおける評価制度について

- ①使命（ミッション）の達成度を測ることが評価の基本となる。
- ②評価を基にPDCAサイクルをすることで、サービスの質を向上させる。

・危機管理とリスク対応について

- ①施設利用者と安全意識を共有することに努めなければならない。
- ②トラブル対応について、内部的要因（人為的要因、物的要因、制度的要因）について発生するものを整理し、管理者として予防に徹しなければならない。
- ③クレーム対応について、サービス業の自覚を持ちつつ、聞く姿勢と誠意を示し、初期対応を迅速に行うことが大事である。



講義 1



講義 2

講義 3「劇場・ホールの事業とは」

講師：間瀬勝一（公社）全国公立文化施設協会アドバイザー
柴田英紀（公社）全国公立文化施設協会アドバイザー

柴田氏から事業には4つの活動領域があると説明があり①文化芸術への場の提供 ②鑑賞機会の提供 ③文化芸術の普及・啓発 ④優れた舞台芸術の創造・育成があると説明があった。

①②③の領域の事業が全体の8割を占めている。加えて、展開される事業は貸館事業と自主（文化）事業の2つに分類される。貸館事業は「文化芸術への場の提供」として重要な文化活動支援事

業であることを理解しなければならない。また、自主公演事業実施にあたり、企画立案から実施後の事務業務まで2年近くの時間が必要であることや企画立案の時点で全ての方針の大枠が決まることから、6W2Hを念頭に置き、練り上げていかなければならないと説明があった。

次に、間瀬氏から施設の受付担当員においても、どのような設備、機材がどのくらいあるのかということも理解していなければならない。自分の担当業務のみならず施設全体を把握するという意識が大切であることや自主公演事業企画立案のポイントとして、幅広い視野で地域の文化資源を捉えること（地域の特性やニーズ、文化的資源を見極め、反映すること）、公演主催者、公演当事者としての意識を強くもつこと、事業担当者は、目の前の事業実施に夢中になり、事業自体を目的化する傾向にあるので、様々な事業は、劇場・ホールの使命（ミッション）を達成するための手段であるということ強く認識しなければならないと説明があった。

講義4「劇場空間とは」

講師：山形 等 （一社）日本劇場技術者連盟顧問
児山 徹 帯広市民文化ホール舞台技術係係長
夷石徳男 （株）北海道共立ホール課主任
吉田仁志 音響家協会講師

山形氏から舞台の形式から「オープン舞台」と「プロセニウム型の劇場」の説明があり、景観を含めた施設全体の環境づくり施設（劇場）で行われる活動を結びつける役割を担うものが組織であり職員であると説明があった。

児山氏から太陽光に頼っていた舞台照明設備が現在の電気照明に至るまでの歴史の説明があり、光を表現するには、方向、大小、強弱、色彩があり、ボーダーライトで実際に実験をするとともに、実際に使用されることが多い照明灯具を実際に点灯し、特徴や使用シーンを説明し、舞台照明の色について、カラーフィルターは8色総分類により分けられ、国内外で分け方や名称が異なると説明があった。

吉田氏は、平台と箱足の組み方を実際に組みながら説明し、平台のやっつけはいけない組み方や吊物の結び方等を説明した。

また、自身が体験した事故の例を交えながら、舞台の設営から撤収に至るまで安全への意識のレベルを高く保つことが肝要であるとした。

夷石氏から、スピーカー及びマイクには様々な種類と使用用途があり、実際に集音の方向が異なるマイクを使用して、その違いを説明した。



講義3



講義4

講義 5 「舞台設備とは」

講師：山形 等 (一社)日本劇場技術者連盟顧問
児山 徹 帯広市民文化ホール舞台技術係係長
夷石徳男 (株)北海道共立ホール課主任
吉田仁志 音響家協会講師

児山氏から、舞台照明設備の歴史を野外で演劇等が行われていた時代から始まり、19世紀に入りガス灯が使われるようになった時代から現代までの変遷をテキストに沿って説明があった。また、遠山静雄著「舞台照明学」の舞台照明の定義を引用し、舞台照明が与える様々な影響や効果についてや劇場の照明設備で演者がどのように見えるのかを講師自らを題材にして解説し、加法混色や減法混色などを舞台上で実演した。

さらに、舞台照明に必要な舞台照明器具等を実際に舞台上に準備し説明があった。

講義 6 「オペラ本番実技」

講師：山形 等 (一社)日本劇場技術者連盟顧問
児山 徹 帯広市民文化ホール舞台技術係係長
夷石徳男 (株)北海道共立ホール課主任
吉田仁志 音響家協会講師
出演：accie(アッチェ)

各研修生等は、希望する担当業務(舞台・照明・音響)に分かれ、準備、リハーサル等を各講師から説明を受けながら実際に体験し、本番を見立てた模擬公演を実施した。リハーサルや模擬公演本番中も参加者同士が互いに声を掛け合いながら実技を行い、最後に参加者全員で舞台上の撤去作業を行った。

講義 7 「舞台における事故防止対策」

講師：山形 等 (一社)日本劇場技術者連盟顧問
児山 徹 帯広市民文化ホール舞台技術係係長
夷石徳男 (株)北海道共立ホール課主任
吉田仁志 音響家協会講師

山形氏から、事故には予兆・前兆が必ずあるので、普段から点検等を行う際には些細な点でも気に掛けることが重要であると説明があり、受付や管理を担当する職員は日頃から現場の保守・点検の書類を確認し、自館の状態を常に把握する必要がある。その上で現場の人が使いやすいように改修・修繕することが望ましいとした。

また、技術担当者や外部委託の場合等でも施設管理者と気軽に意見交換できる環境づくりが必要であり、何が危険かを認識することが大切であるので、そのために日頃から知識を蓄える必要があると説明があった。

講義 8 「危機管理マニュアルの作成について」

講師：間瀬勝一（公社）全国公立文化施設協会アドバイザー

間瀬氏から、劇場等は来館される全ての方々が安心・安全で心豊かな時を過ごせる場所になるために安全対策を講じる必要があると説明があった。

また、災害時は一時避難場所として活用されるため不測の事態にも対応が求められると説明があった。

マニュアルの作成については、危機管理マニュアルは目的・定義・組織体制・役割責任を明確にして作成する必要があることや地震災害や火災など様々なケースを想定し、不測の事態にも対応手順を定め、作成後もマニュアルの再点検を行い、修正を加えること、施設全体で行う訓練は実際の勤務に合わせて少人数で実施する必要があることや劇場では公演の継続中止判断が必要になることから、その点を盛り込んだ危機管理マニュアルにする必要があると説明があった。



オペラ本番実技

3 研修を終えて

参加者の多くが、初任者や事務方であったためアートマネジメント研修と技術職員研修を同時に受講することができたことは、この形態での研修実施の最大のメリットであったと思います。

また、全国研修会でしか聞けない講師の講義が聞くことができたこと、さらに日常的に習得することが困難な技術や経験談等を技術専門講師から直接参加者が体感し理解することができたことからとても有意義であったと感じます。

舞台装置や照明、音響装置を直接参加者が手で触れ、操作することにより得られる難しさや楽しさといった部分を参加者が直接身をもって頭で知る・身体で体感することが出来たのではないだろうか。

そのような研修内容であったためか、参加者から回収したアンケートでは、多くの参加者から「満足」の評価を頂戴し、「とても勉強になった」「非常に濃い内容で、もう少し時間を増やしてほしい」「今後のホール運営に役立てたい」と言った満足度の高いご意見を頂戴することが出来ました。

アートマネジメント及び技術職員研修の合同開催と研修内容の両方から大きな収穫及び成果があったと思います。

平成 29 年度文化庁委託事業
東北地域劇場・音楽堂等技術職員研修会実施報告

開催概要

事業名	平成 29 年度東北地域劇場・音楽堂等技術職員研修会
趣旨	公立文化施設の舞台技術初任者を対象として、舞台技術に関する専門的な研修を行うことにより地域の文化芸術の振興と公立文化施設の活性化に資する。
開催期間	平成 29 年 9 月 19 日（火）～ 9 月 20 日（水）
会場	日立システムズホール仙台（シアターホール） 〒981-0904 宮城県仙台市青葉区旭ヶ丘 3 丁目 27-5
担当施設	日立システムズホール仙台
参加人数	54 名（参加施設 37 施設）

研修計画・日程

	日時	内容	講師等
9/19 （火）	13：40～15：40	講義 1 「これからの劇場・音楽堂等に望まれる改修の考え方」	講師 草加叔也氏（（有）空間創造研究所代表取締役）
	15：40～16：00	（休憩）	
	16：00～17：30	講義 2 「舞台監督とホール管理技術者」 綱元の実技研修	講師 石井忍氏（（有）舞台監督工房代表取締役） 赤田知子氏（（株）東北共立） 齊藤眞樹子氏（（株）東北共立）
9/20 （水）	9：20～10：30	講義及びディスカッション「劇場・音楽堂の管理運営における危機管理について 1」	講師 山形裕久氏（（公社）全国公立文化施設協会コーディネーター 近畿支部アドバイザー）
	10：30～10：40	（休憩）	
	10：40～11：40	講義及びディスカッション「劇場・音楽堂の管理運営における危機管理について 2」	講師 山形裕久氏（（公社）全国公立文化施設協会コーディネーター 近畿支部アドバイザー）

研 修 会 記 録

1 はじめに

平成 29 年度東北地域別劇場・音楽堂等技術職員研修会は、平成 29 年 9 月 19 日(火)・20 日(水)の 2 日間にわたり、日立システムズホール仙台シアターホールにおいて開催された。

1 日目は、全国的に多数の会館が大規模改修時期を迎える状況をふまえ、文化施設の改修をテーマとした講演のほか、ホールのイベント時に主催者側の舞台責任者となる舞台監督と、施設側の管理担当者によるディスカッションを行い、その後、実際に綱元の実技を行った。

2 日目は、事前に各館から寄せられたアンケート結果を基に管理運営における危機管理について、ディスカッションを行った。

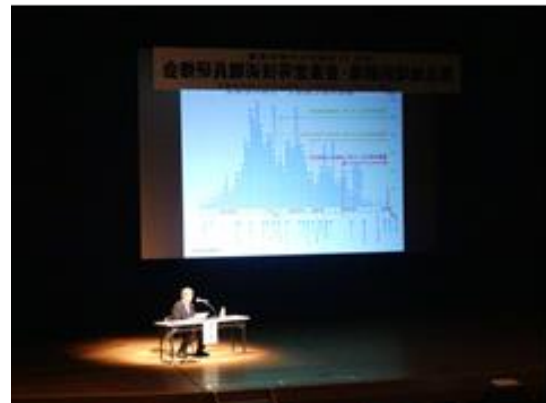
2 研修内容

講義 1 「これからの劇場・音楽堂等に望まれる改修の考え方」

講師：草加叔也（(有)空間創造研究所代表取締役）

資料を基に、これからの改修の考え方をテーマに講演を行った。

- ・ 建物は、段々と劣化、老朽化していくもので、今必要な機能を何らかの形で取り戻してやらないと現在の文化を支える機能を段々失っていく可能性がある。
- ・ 平成 6 年～8 年頃各都道府県に年間 2.3 館の公立文化施設が開館した年があったが、最近は、全国で 1 年間 10 館開館するのはまれで、1 桁は当たり前である。
- ・ 劣化の種類は、経年劣化、機能劣化、性能劣化の 3 種類がある。
- ・ 三者（市民・利用者、施設設置者、管理運営者）の理解と協力が必要である。
- ・ 東日本大震災後、地震時における天井脱落による被害を防止すべく、「特定天井」に該当する場合には、脱落防止対策を行うことが義務づけられた。



講義 2 「舞台監督とホール管理技術者」

講師：石井忍（(有)舞台監督工房代表取締役）

赤田知子（(株)東北共立）

齊藤眞樹子（(株)東北共立）

- ・ 舞台監督の仕事内容やホールの管理スタッフとの関係などの話や、自分の体験談（緊急時のトラブルへの対応、利用者への対応など）、事前アンケートの内容を基に話を行った。
- ・ 舞台上で実際に綱元の実技を行った。



講義及びディスカッション「劇場・音楽堂の管理運営における危機管理について 1・2」

講師：山形裕久（(公社)全国公立文化施設協会コーディネーター、近畿支部アドバイザー）

パネリスト：石井忍（(有)舞台監督工房代表取締役）

- ・ 事前アンケートを基に、他館が抱えている施設運営上の色々な問題とその対応、対処法などを聞いていく講座を行った。
- ・ 高所作業や暗所作業における労働基準法に係る諸問題などを学んだ。
- ・ 阪神淡路大震災時のホール状況の資料を見せていただいた。



3 研修を終えて

① 事業評価

今回の研修会は、劇場等の特殊空間における改修の重要性・必要性及び検討事例などの解説、舞台監督とホール技術者の現場からの声、危機管理における他館の事例、講師の事例及び対応等の座学であったが、受講者からのアンケート回答を見るとどのテーマについても受講者からは、「満足」「どちらかといえば満足」との評価を得た。

② 研修会の意義

今回学んだ安全管理や危機管理について、各施設職員は、日々の業務の中で確認や備えが必要であることを共有し、市民や利用者には何かトラブルが発生した時は、適切に対応する必要があることを再認識できた。

東日本大震災の時、ホールに影響を受けている会館が多く、まだ改修を行っていない会館や劣化、老朽化により今後ホール改修を検討している会館に、今回学んだ改修の考え方を参考にしたい。

③ 今後の課題について

この研修会で得たものが、今後の会館管理業務に繋がることを期待したい。今回の研修会は座学が中心で、実技、実践は綱元だけであったため、技術職員にとっては、実技（特に照明（昨の東北地域では音響中心））、実践の要素がもっとあってもよかった。

平成 29 年度文化庁委託事業
関東甲信越静地域劇場・音楽堂等技術職員研修会実施報告

開催概要

事業名	平成 29 年度関東甲信越静地域劇場・音楽堂等技術職員研修会
趣旨	劇業・音楽堂の舞台技術等を管理、運営している職員を対象とし、舞台技術に関する専門的な研修を行うことにより地域の文化芸術の振興と劇場・音楽堂等の活性化に資する。
開催期間	平成 29 年 12 月 6 日（水）～ 12 月 7 日（木）
会場	ホクト文化ホール（長野県県民文化会館） 〒380-0928 長野県長野市若里一丁目 1 番 3 号
担当施設	長野県県民文化会館
参加人数	51 名（参加施設 28 施設）

研修計画・日程

日時	内容	講師等
12/6 （水）	13:40～15:10 講義 1「舞台技術者の人材育成と求められる役割について」 ・公演をするために ・管理・運営をするために（危機管理体制） ・改修工事とは	講師 市川悟氏（彩の国さいたま芸術劇場 劇場部参事兼総務部副参事兼利用調整課長）
	15:30～17:00 講義 2「舞台音響設備の改修について」～実際の事例から～ ・彩の国さいたま芸術劇場 ・ホクト文化ホール（長野県県民文化会館）大ホールの音響設備改修の経緯と内容 ・改修施設・設備等見学（希望者）	講師 市川悟氏 中村和楽氏（長野県県民文化会館 舞台技師） 兼子紳一郎氏（ヤマハサウンドシステム(株) 設計企画部テクニカルマーケティング課課長） 阿部良生氏（ヤマハサウンドシステム(株) 技術部） 甲斐慎一氏（ヤマハサウンドシステム(株) 保守課） 竹内薫氏（ヤマハサウンドシステム(株) 東日本営業部）
	17:00～	ホクト文化ホールの施設改修部分、設備等の見学と質問

12/7 (木)	9 : 15～10 : 45	<p>講義 3 (舞台音響設備の最近の動向) 「舞台音響で活用されているツールについて」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音響機器のリモート制御 ～モバイルツールの利用～ ・スピーカーシュミレーション ～改修事例での検討例～ 	<p>講師 兼子紳一郎氏 小嶺秀治氏 (ベストエックオーディオ(株)技術部課長)</p>
	11 : 00～12 : 30	<p>講義 4 実習 各社音響ミキサーを中心とした操作体験</p>	<p>講師 浜末幸氏 (ヤマハサウンドシステム(株)設計企画部テクニカルマーケティング課) 古川晋也氏 (ヒビノ(株)東京第二営業部設備営業チーム) 飯野秀樹氏 (ヤマハサウンドシステム(株))</p>
	12 : 30～	<p>講義終了後、ホクト文化ホール改修設備、機材等の見学と体験</p>	



施設入口



第1日目受付

研修会記録

1 はじめに

①研修目的

劇場・音楽堂等の舞台技術を管理、運営している職員を対象とし、舞台技術に関する専門的な研修を行うことにより地域の文化芸術の振興と劇場・音楽堂等の活性化に資する。

②研修内容の概要等

1 日目は、長年公立文化施設に携わってきた経験豊富な技術者により、次世代とりわけ文化施設の舞台担当経験 5 年程度の者を主な対象として、文化施設における役割や基礎的な考え方等、

知っておいて欲しい知識や考え方を講義いただくとともに、近年、多くの文化施設で改修時期を迎えており、その対応にあたり、現場である舞台担当が取り組んでいかなければならない日々の対応や、事柄などを実際の改修事例からお話いただいた。

2 日目においては、改修等で実際に必要となる最新機材やトレンドの知識と操作体験をしていただくことにより、今後のシステム展開に対する考え方や施設側のサービス対応に役立てていただくことを目指した。

2 研修内容

講義 1 「舞台技術者の人材育成と求められる役割について」

講師：市川悟（彩の国さいたま芸術劇場 劇場部参事兼総務部副参事兼利用調整課長）

- ・公演をするために
- ・管理・運営をするために（危機管理体制）
- ・改修工事とは

公立文化施設の管理運営に必要な基礎的知識の再確認と留意点、及び危機管理について講義いただくとともに、改修工事の実例として、財政当局との交渉を始め、改修時に行われた実務と苦勞された経験例を中心に、日々の業務や保守点検から大事にしていくことの重要性をご教授いただいた。



講義 1



講義 1

講義 2 「舞台音響設備の改修について」～実際の事例から～

講師：市川悟（彩の国さいたま芸術劇場 劇場部参事兼総務部副参事兼利用調整課長）

中村和楽（長野県県民文化会館 舞台技師）

兼子紳一郎（ヤマハサウンドシステム(株) 設計企画部テクニカルマーケティング課課長）

阿部良生（ヤマハサウンドシステム(株) 技術部）

甲斐慎一（ヤマハサウンドシステム(株) 保守課）

竹内薫（ヤマハサウンドシステム(株) 東日本営業部）

- ・ 彩の国さいたま芸術劇場の事例として、講義 1 に引き続き改修事例の補足説明。
- ・ 長野県県民文化会館大ホール音響設備改修の経緯と実際に改修に係わったホール担当者と音響会社による事例説明。
 - 経年劣化との戦い、機材維持の現状。
 - 改修工事を行う前に（デッドポイントをなくす対策とスピーカー・音響卓・移動型ステージスピーカーの選定。スピーカーEQ(LAKE)
 - 外部オペレーターへの配慮。
 - LAN 等ネットワークにおける映像関係の扱い、館内中小ホールとの連携等。



講義 2



講義 2

ホクト文化ホールの施設改修部分、設備等の見学と質問

講師：市川悟（彩の国さいたま芸術劇場 劇場部参事兼総務部副参事兼利用調整課長）
 中村和楽（長野県県民文化会館 舞台技師）
 兼子紳一郎（ヤマハサウンドシステム(株) 設計企画部テクニカルマーケティング課課長）
 阿部良生（ヤマハサウンドシステム(株) 技術部）
 甲斐慎一（ヤマハサウンドシステム(株) 保守課）
 竹内薫（ヤマハサウンドシステム(株) 東日本営業部）

※ ホクト文化ホールの施設改修部分、設備等の見学と質問（希望者）

講義 3（舞台音響設備の最近の動向）「舞台音響で活用されているツールについて」

講師：兼子紳一郎（ヤマハサウンドシステム(株) 設計企画部テクニカルマーケティング課課長）
 小嶺秀治（ベストックオーディオ(株) 技術部課長）

- ・ 音響機器のリモート制御 ～モバイルツールの利用～
- ・ スピーカーシュミレーション ～改修事例（ホクト文化ホール）での検討例～

音響を映像で視覚化し、各種制御・監視・記録を行っていくシステムの仕組みと考え方、活用例を紹介した。当然、長所短所があるが、リモート制御によって効率化・省力化が図られるということと、音が見えるということが、音響担当者だけに有益だけでなく、事務系を始めとする他者への説明にも有益と感じられた。

講義 4 実習「各社音響ミキサーを中心とした操作体験」

講師：浜未幸（ヤマハサウンドシステム(株) 設計企画部テクニカルマーケティング課）
古川晋也（ヒビノ(株) 東京第二営業部設備営業チーム）
飯野秀樹（ヤマハサウンドシステム(株)）

音響卓、タブレットとツールを中心に実体験。

使用機器は、YAMAHA QL1 及び QL Stage Mix / DiGiCo SD9 / DiGiCo SD Remote Control / SHURE Wireless WorkBench 6 及び SHURE UHF-R によるネットワーク / ホクト文化ホールの大ホール機材。



講義 3



講義 4

3 研修を終えて

指定管理制度の導入以来、職員育成を取り巻く環境も大きく変わっている。

管理者交代や先輩達がいらない等、施設管理に継続性を求められない状況のせいも、経験の乏しい方は勿論のこと、民間音響オペレーターとして高い技術力と経験のある方であっても、「小屋付き」と呼ばれる公立文化施設の担当者となって、戸惑うことがあるようである。基本的な舞台管理の知識や考え方も欲していると感じられる記載がアンケートに多く見受けられる。

設備改修については、自治体等の担当と指定管理の現場とのギャップや、自分たちも経験するであろうと思われる事柄への対処実例が紹介され、この自分たちと同じ舞台技術者の立場による実例紹介は、これからの日々の業務にも前向きな意欲を掻き立てる契機となったようである。参加者が、「自分の施設に帰って、出来ることから始める」、「できたら来年も参加したい」と笑顔で、述べて帰られる方が多かったのが印象的であった。

平成 29 年度文化庁委託事業
東海北陸地域劇場・音楽堂等技術職員研修会実施報告

開催概要

事業名	平成 29 年度東海北陸地域劇場・音楽堂等技術職員研修会
趣旨	劇場・音楽堂等の舞台技術等を管理、運営している職員を対象とし、舞台技術に関する専門的な研修を行うことにより地域の文化芸術の振興と劇場・音楽堂等の活性化に資する。
開催期間	平成 30 年 1 月 18 日（木）～ 1 月 19 日（金）
会場	瑞浪市総合文化センター 〒509-5101 岐阜県瑞浪市土岐町 7267-4
担当施設	瑞浪市総合文化センター、名古屋市青少年文化センター、愛知県芸術劇場
参加人数	48 名（参加施設 25 施設）

研修計画・日程

日時	内容	講師等	
1/18 (木)	13:15～13:30	開講式	
	13:30～15:00	【研修Ⅰ】 「日本舞踊の舞台の作り方1」(座学)	講師 西川長秀氏（日本舞踊西川流師範） 逆瀬川浩氏（榊三光） 野々村篤寛氏（公益財団法人名古屋市文化振興事業団）
	15:00～15:15	休憩	
	15:15～17:00	【研修Ⅱ】 「日本舞踊の舞台の作り方2」(実習)	講師 西川長秀氏 逆瀬川浩氏 野々村篤寛氏
	17:00～17:30	施設見学	
	18:00～19:30	情報交換会	

日時	内容	講師等	日時
1/19 (金)	10:30~11:30	【研修Ⅲ】 「技術職員から見る大規模改修工事」 (講演)	講師 本杉省三氏 (日本大学理工学部特任教授)
	11:30~12:30	休憩	
	12:30~14:30	【研修Ⅳ】 「事例紹介とパネルディスカッション」	パネラー 本杉省三氏 宮嶋浩氏 (パロー文化ホール館長) 靱山勝人氏 (長久手文化の家事務局長) コーディネーター 浅野芳夫氏 (愛知県芸術劇場劇場運営部長)
	14:30~14:45	閉講式	

研修会記録

1 はじめに

東海北陸地域技術職員研修会は、文化庁の委託を受けて、舞台技術に関する専門的な研修を行うことにより地域の文化芸術の振興と劇場・音楽堂等の活性化を図るために、劇場・音楽堂等の舞台技術等を管理、運営している職員を対象に毎年実施しています。

平成29年度は、日本の伝統芸能である「日本舞踊」を取り上げ、劇場管理者からの視点と、出演者や狂言方からの視点で、日本舞踊の舞台づくりを学びました。

また、技術職員として知っておきたい大規模改修工事に係る基礎的な知識を事例紹介、パネルディスカッションもまじえて学びました。

2 研修内容

研修Ⅰ「日本舞踊の舞台の作り方1」(座学)

講師：西川長秀 (日本舞踊西川流師範)

逆瀬川浩 (株三光)

野々村篤寛 (公益財団法人名古屋市文化振興事業団)

内容 日本伝統芸能である「日本舞踊」。しきたりや歴史などを解説いただきながら、劇場管理者の視点と、出演者や狂言方からの視点で、日本舞踊の舞台づくりを学んでいきました。

研修Ⅱ「日本舞踊の舞台の作り方2」(実習)

講師：西川長秀（日本舞踊西川流師範）

逆瀬川浩（株三光）

野々村篤寛（公益財団法人名古屋市文化振興事業団）

内容 所作台を中心とした実習。日本舞踊の舞台づくりの多くの決まり事を、間近で見聞きすることで、その「なぜ」を解説し、実際に舞台上に所作台を並べました。



研修Ⅰ「日本舞踊の舞台の作り方1」(座学)



研修Ⅱ「日本舞踊の舞台の作り方2」(実習)

研修Ⅲ「技術職員から見る大規模改修工事」(講演)

講師：本杉省三（日本大学工学部特任教授）

内容 大規模改修工事はどの施設にとってもいつかは実施しなければならない工事です。自治体直営でない施設の場合も、施設を所有する自治体が主導的に工事の計画を進めていくことになるのが一般的と思われます。その時に現場の意見をどう反映してもらえるかが肝要です。そのために、技術職員として知っておきたい大規模改修工事に係る基礎的な知識を学びました。

研修Ⅳ「事例紹介とパネルディスカッション」

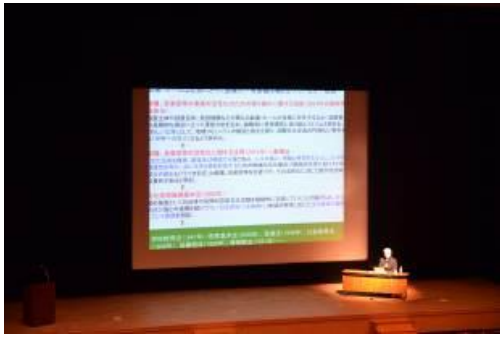
パネリスト：本杉省三（日本大学工学部特任教授）

宮嶋浩（パロー文化ホール（公益財団法人多治見市文化振興事業団）館長）

榎山勝人（長久手文化の家（長久手くらし文化部）事務局長）

コーディネーター：浅野芳夫（愛知県芸術劇場（公益財団法人愛知県文化振興事業団）劇場運営部長）

内容 大規模改修を最近に行った施設の事例紹介と、専門家による見解などをパネルディスカッション形式で紹介しました。



研修Ⅲ「技術職員から見る大規模改修工事」(公演)



研修Ⅳ「事例紹介とパネルディスカッション」

3 研修を終えて

研修Ⅰ・Ⅱでは、所作台を舞台における所作台の持つ意義や歴史を聴講した上で実際に組立実習を行い、決まり事や管理方法等について学びました。その後、西川師範様、逆瀬川様から出演者側の視点において良い舞台にするための注意点等についてご教授いただきました。制作側、出演者側双方の立場から同時にお話を伺えたことは貴重な経験となりました。

研修Ⅲ・Ⅳでは、今後の施設運営に欠かすことのできない特定天井の改修を含む大規模改修について、講演とパネルディスカッションで学びました。

講演においては、施設運営における地震等の災害対策の必要性について具体的にご教授いただきました。特に天井落下による被害は想像を超える大きさであり、早急な対策の必要性について認識することができました。

一方、パネルディスカッションにおいては、大規模改修実施済みの施設から改修の実施にかかる工夫や苦労話の他、指定管理者と行政との視点のズレに起因する問題などについての意見をいただきました。大規模改修工事は、施設運営において必ず通過しなければならない事柄であり、これから大規模改修を実施する施設にとって有意義な研修となりました。

また、参加者のアンケート結果は概ね高評価でありましたが、アクセスの不便さ等に係るご意見もありましたので、今後の対応が必要と感じています。

最後に、今回の研修でお世話になりました皆様にご挨拶申し上げます。

平成 29 年度文化庁委託事業
近畿地域アートマネジメント・技術職員研修会実施報告

開催概要

事業名	平成 29 年度近畿地域アートマネジメント・技術職員研修会
趣旨	近畿地域の公立文化施設の職員等を対象として、アートマネジメント能力と技術能力の向上に関する専門的な研修を行い、地域の文化芸術の振興と公立文化施設の活性化に資することを目的とする。
開催期間	平成 30 年 2 月 1 日（木）～ 2 月 2 日（金）
会場	神戸市立灘区民ホール 〒657-0832 兵庫県神戸市岸地通 1-1-1
担当施設	吹田市文化会館（メイシアター）
参加人数	38 名（参加施設 18 施設）

研修計画・日程

日時	内容	講師等	
2/1 (木)	13:30~13:45	開講式	
	13:45~15:15	講義 1「高所作業における取組・現状・注意点」	講師 大西昭吉氏（大西安全コンサルタント事務所） アシスタント 山形裕久氏（(公社)全国公立文化施設協会コーディネーター）
	15:15~15:35	休憩	
	15:35~16:35	実習 1「高所作業における実践編」	講師 山形裕久氏 アシスタント 大西昭吉氏
	16:35~16:50	休憩	
	16:50~17:50	実習 2「高所作業における実践編」	講師 山形裕久氏 アシスタント 大西昭吉氏
	18:30~20:00	情報交換会	

	日時	内容	講師等
2/2 (金)	9:30~10:00	受付	
	10:00~11:30	講義2「文化庁、京都への移転 これから」	講師 山口荘八氏（文化庁長官官房地域文化創生本部暮らしの文化・アートグループ グループリーダー）
	11:30~11:45	休憩	
	11:45~12:30	実習3「公共ホールにおける良いコンサートを創るための条件」	講師 宮本慶子氏（マリンバ奏者）
	12:30~13:30	休憩	
	13:30~14:40	実習4 パネルディスカッション「公共ホールにおけるコンサートの役割」	コーディネーター・パネラー 延原武春氏（日本テレマン協会） パネラー 古谷光広氏（サクソ演奏者） 松村公彦氏（和太鼓松村組） 宮本慶子氏
	14:40~14:50	休憩	
	14:50~15:35	実習5「ホールの特性を活かした音響ミキシングによるジャズ音楽のアンサンブル」	講師：山形裕久氏 深尾康史氏 演奏 甲陽音楽学院メンバー
15:35~15:45	閉講式		

研修会記録

1 はじめに

本研修では、1日目に劇場においての高所作業の現状・注意点を学び、2日目は今後の劇場を管理運営する上で大切な事を各分野の専門家からお話を伺った。

2 研修内容

講義1「高所作業における取組・現状・注意点」

講師：大西昭吉（大西安全コンサルタント事務所）

アシスタント：山形裕久（（公社）全国公立文化施設協会 コーディネーター）

大西安全コンサルタント事務所の大西昭吉氏から「高所作業における取組・現状・注意点」と題して、安全の基本的考え方と変わりつつある日本の法律、高所作業の保護具、ヒューマンエラーと災害防止活動についてお話を伺った。

高所作業での事故が後を絶たない現状の中、墜落防止策として、高所作業床、ローリングタワー、開口部、ピットその他の墜落のおそれのある場所には、手すり、囲い、覆いを設ける。これらの処置が困難な場合は、防網を張り、安全帯取り付け設備を設け、安全帯を使用させる事を学んだ。

これからの安全の基本的考え方として、「災害は人のミスで起こるから教育・訓練でミスをしないようにする」という従来の考え方から、「人はミスをする、機械は故障するという考えのもと、ミスをしたとしても機械が故障したとしても人にとって安全な機械（職場）にする」という考え方変わった。そのため残ったリスクを教育・訓練でカバーできる安全文化を構築する重要性を学んだ。

実習 1、2 「高所作業における実践編」

講師：山形裕久（(公社)全国公立文化施設協会 コーディネーター）

アシスタント：大西昭吉（大西安全コンサルタント事務所）

舞台上でイントレを実際に組み立てながら、高所作業における危険性、転落防止策について議論した。

安全帯をかける、保護帽の着用、囲い・手すり・覆いの設置、加えて囲い等を設けることが困難な場合は防網を張り労働者の危険を防止する措置をとることの必要性を学んだ。

また、完成したイントレに参加者がのぼり、安全帯、保護帽を着用し安全に作業する方法を確認した。



講義 1



実習 1、2

講義 2 「文化庁、京都への移転 これから」

講師：山口 荘八（文化庁長官官房地域文化創生本部暮らしの文化・アートグループグループリーダー）

文化庁の組織と業務概要、文化芸術基本法、文化庁の京都への移転についてお話を伺った。

現在、文化庁の本格移転に向けた準備とともに、これまでの文化行政の枠組みにとらわれず、地元の協力を得ながら新たな政策ニーズに対応した事務・事業を先行的に実施するため地域文化創生本部を京都に設置した。

業務内容は、新たな政策課題への対応のための政策調査研究、文化芸術資源の活用による共生社会実現への貢献・人材育成、伝統工芸や生活文化に関する調査研究・施策の検討、文化財等を生かした広域文化観光・まちづくりモデルの開発、文化観光拠点の形成支援、東アジア文化都市やICOM2019 京都大会連携にかかる関連業務等である。



講義 2

実習 3 「公共ホールにおける良いコンサートを創るための条件」

講師：宮本慶子（マリンバ奏者）

長年にわたりマリンバ奏者としてホールに係ってこられた立場として様々な意見を伺った。

宮本氏は神戸ビエンナーレ エグゼクティブディレクター、神戸芸術文化会議常任委員、神戸音楽家協会、兵庫県音楽活動推進会議、サマーミュージックステーション等を立ち上げから関わり、代表や幹事を務められている事もあり、芸術家を束ねる組織の重要性、またホールはそのような組織と協力し事業を実施していく事の必要性を伺った。

宮本氏が求めるホールの役割としては、アーティストに賞を与える機会を作る、観客のマナーを向上させる、非日常的空間を作る等の考えを伺った。

実習 4 パネルディスカッション「公共ホールにおけるコンサートの役割」

コーディネーター・パネラー：延原武春（日本テレマン協会）

パネラー：古谷光広（サクソ奏者）

松村公彦（和太鼓松村組）

宮本慶子（マリンバ奏者）

「公共ホールにおけるコンサートの役割」と題して、演奏者をパネラーに迎え様々な意見をお聞きした。

演奏者の立場からホールに求めるものとして、地元のアーティスト育成、ライブハウスのような小規模なところではなく大きなホールで演奏する機会の提供、アーティストがプロとして生活していける環境づくり、子どもから40代までを対象とした若年層向けの企画を実施、といった意見が出た。

また指定管理者制度に対する意見として、何年かで指定管理者が変更になるのは良くない、地域とのつながりが無くなってしまった、ホール館の連携が無くなった等の意見が出た。



実習 3



実習 4

実習 5 「ホールの特性を活かした音響ミキシングによるジャズ音楽のアンサンブル」

講師：山形裕久（(公社)全国公立文化施設協会 コーディネーター）

深尾康史

出演：甲陽音楽学院メンバー

舞台監督 山形裕久氏、音響監督 深尾康史氏監修のもとジャズ音楽の音響仕込みを学び、その後、世界トップクラスの音楽大学であるアメリカ・バークリー音楽大学との提携校である甲陽音楽学院学生のジャズ演奏を鑑賞した。

一般的なホールにある音響設備でセッティングし、音響のプランニングを勉強した。マイクチェックをしながらホールにあった音作り、ジャズ特有の音作りを学んだ。



実習 5



実習 5

3 研修を終えて

今回の研修では、1日目に舞台職員を中心に高所作業における取組・現状・注意点を学んだ。

参加者は高所作業における危険性をあらためて考えさせられ、舞台における事故を未然に防止する良い機会となった。ホールの安心安全を確保していくには今後もこのような研修会を実施していく事の必要性を強く感じた。

2日目は事業課職員を対象に、ホールに係る各分野の専門家からお話を伺い、アートマネジメントについて学んだ。

普段お聞きすることのないようなホールに対する様々な意見を聞くことができ、参加者は今後のアートマネジメントに活かしていただければと考える。また、より良い事業を実施していきたいという強い熱意を参加者・講師から感じる事ができ、大変有意義な時間となった。

平成 29 年度文化庁委託事業
中四国地域劇場・音楽堂等技術職員研修会実施報告

開催概要

事業名	平成 29 年度中四国地域劇場・音楽堂等技術職員研修会
趣旨	劇場・音楽堂等の職員を対象として、施設の管理運営を行う上で直面している課題について専門的な研修を行うことにより地域の文化芸術の振興と劇場・音楽堂等の活性化に資する。
開催期間	平成 30 年 1 月 18 日（木）～ 1 月 19 日（金）
会場	島根県芸術文化センター「グラントワ」 いわみ芸術劇場 〒698-0022 島根県益田市有明町 5 番 15 号
担当施設	島根県芸術文化センター「グラントワ」 いわみ芸術劇場
参加人数	37 名（参加施設 24 施設）

研修計画・日程

	日時	内容	講師等
1/18 (木)	13:30～13:45	開講式	
	13:45～15:15	講義「舞台機構の安全管理について」	講師 前原英文氏（森平舞台機構（株））
	15:15～15:30	休憩	
	15:30～17:00	講義「照明業務の安全管理について」	講師 片野豊氏（（株）共立）
1/19 (金)	9:00～10:30	講義「音響業務の安全管理について」	講師 西村岩夫氏（ヤマハサウンドシステム（株））
	10:30～10:45	休憩	
	10:45～11:45	危険リスクに関する討論会	
	11:45～12:00	閉講式	

研修会記録

1 はじめに

平成 29 年度中四国地域劇場・音楽堂等技術職員研修会は、舞台の基本である安全について「舞台・音響・照明」の 3 セクションから各講師を招き、演出空間である舞台全般に関して安全に対する講義を 2 日間の日程で開催した。公共文化施設としての安全に関しては各施設に於いて避難訓練等で実施されていると思われるが、舞台機構や様々な音響・照明設備が備わっている特殊な空間での安全に対する意識、労働災害に繋がる危険性の発生減少等を認識、習得する事を目的とした。

2 研修内容

講義 I 「舞台機構の安全管理について」

講師：前原英文（森平舞台機構(株)）

当館が開館した 12 年前、舞台機構や設備の設計・施工に携わって頂いた前原英文氏を講師に招き、「グラントワの安全システムができるまで」という内容で、大規模設備の管理を少人数で安全に運営する為のシステム構築や、音響反射板を実際に動かし装備されている安全装置の仕組み等を学んだ。舞台機構等の安全性だけではなく、機構操作に伴うリスクの原因や種類（ヒューマンエラーから発生する危険など）機械を操作する人間の思い込みから起こる事故や災害は、安全作業教育を重ねて行う事で低減出来る事を説明され、ハード・ソフト面の両面から危険を回避する必要性を明示された。同時にリスクアセスメントを日常的に取り入れていく事の重要性も説明された。



講義 I 「舞台機構の安全管理について」



講義 I 実演「音響反射板操作」

講義Ⅱ「照明業務の安全管理について」

講師：片野豊（(株)共立 安全衛生推進室アドバイザー）

演出空間で起こる事故や労働災害について十数年前の労働災害データと近年のデータを比較し、災害が起こる時間帯・作業内容等が大きく変わらない事を示唆された。

また、事故の内容を分析し事故の要因、事故の際の身体損傷部位について解説された。現場の声の調査も行われ、所謂「マーフィーの法則」を参考に、今後の事故防止対策についての講義が行われた。

小規模の事業所でも事故防止の措置を講じる為に「安全衛生推進者」の選任が必要になってくるということであった。

※ 施設見学（自由参加）

情報交換会までの時間、劇場の大小ホールを開放し自由見学の時間とした。各会場は当館の舞台スタッフが案内した。

また、講義Ⅰで説明された事に対して機構の異なる小ホールではどの様に対応しているかと質問があり、実際に小ホールにて操作を行い参加者との検証も行った。

講義Ⅲ「音響業務の安全管理について」

講師：西村岩夫（ヤマハサウンドシステム(株)）

舞台の安全管理と言えれば舞台装置がメインと思われがちであるが、音響機材も同様にスピーカ、音響卓など重量物があり、転倒防止、落下防止、電気事故など大きな事故に繋がるセクションである。

危険を回避するためには、作業に適した服装、装備、道具を必要とし、また、安全確保に必要な取組として危険に関する情報を共有するための作業前ミーティング、危険を予知し、リスクアセスメントを行い、質の高い音響空間で公演が安全に円滑に進むよう実施されていることを改めて知る機会となった。



講義Ⅱ「照明業務の安全管理について」



講義Ⅲ「音響業務の安全管理について」

討論会

パネラー：前原英文（舞台講師）

片野 豊（照明講師）

西村岩夫（音響講師）

コーディネーター：大庭暢哉（いわみ芸術劇場、舞台技術振興課長）

講師3名をパネラーに討論会を行なった。

事前に研修生（聴講生を含む）から提出された質問にパネラーが回答し、会場の参加者からも質問・意見を聞く進行で行なった。

有事の際の責任所在、自館の安全対策をどの様にするか、ツアースタッフへの安全対策をどの様にするか等について質問が出された。その他、事務担当者との事務連携、作業開始時の作動チェックなど、各館独自での改善点が意見として出された。

参加者の地域性や、経験年数により考え方が違い、他館の意見を聞いて参考にする事もあったようである。



討論会



意見交換

3 研修を終えて

各セクション（舞台機構、音響、照明）の立場からの安全をテーマとした研修は、あまりなかったため非常に興味深く、舞台に携わる者としてとても貴重な講義であった。また、アンケート集計でも同様の回答が多数あった。

反対に、セクションは違っても安全管理については講義内容が重なっているとの声もあったが、安全について重複することは大事なことであり、やり過ぎることはないと思った。

平成 29 年度文化庁委託事業
九州地域劇場・音楽堂等技術職員研修会実施報告

開催概要

事業名	平成 29 年度九州地域劇場・音楽堂等技術職員研修会
趣旨	公立文化施設の舞台技術初任者を対象として、舞台技術に関する専門的な研修を行うことにより地域の文化芸術の振興と公立文化施設の活性化に資する。
開催期間	平成 29 年 11 月 28 日（火）～ 11 月 29 日（水）
会場	鹿児島県文化センター（宝山ホール） 〒892-0816 鹿児島県鹿児島市山下町 5-3
担当施設	佐賀市文化会館
参加人数	46 名（参加施設 28 施設）

研修計画・日程

	日時	内容	講師等
11/28 （火）	13：30～13：45	開講式	
	13：45～15：15	講義Ⅰ 平成 26 年度劇場・音楽堂等人材養成講座テキスト基礎編より「第 4 章 劇場空間とは」	講師 鈴木輝一氏（（株）ピー・フォー代表取締役）
	15：15～15：30	休憩	
	15：30～17：00	講義Ⅱ 平成 26 年度劇場・音楽堂等人材養成講座テキスト基礎編より「第 5 章 舞台設備とは」	講師 鈴木輝一氏
11/29 （水）	9：30～10：30	講義Ⅲ 「公立文化施設の危機管理」～自然災害、事故防止、テロ対策～	講師 本間基照氏（（株）インターリスク総研マネジャー・上席コンサルタント）
	10：30～10：45	休憩	
	10：45～11：45	講義Ⅲ 「公立文化施設の危機管理」～自然災害、事故防止、テロ対策～	講師 本間基照氏
	11：45～12：00	閉講式	

研修会記録

1 はじめに

昨年度の九州地域技術職員研修会では、劇場・音楽堂等人材養成講座の第2章と第3章をプログラムに取り上げ講義を行った。今回は引き続き、第4章「劇場空間とは」と第5章「舞台設備とは」の内容を鈴木輝一氏に講義を頂き、劇場・音楽堂等で働くすべての人材が共通に身につけておくべき基礎的素養の習得を目的とし、実施した。

また、地震や水害の自然災害や施設内で起こる様々な事故やトラブルに対する危機管理について、講師の本間基照氏にグループワークでの討議を交えながらの研修を実施して頂いた。

2 研修内容

講義Ⅰ 平成26年度劇場・音楽堂等人材養成講座テキスト基礎編より「第4章 劇場空間とは」

講師 鈴木輝一 ((株)ピー・フォー代表取締役)

- ・舞台芸術の特徴は、時間と空間を共有すること。作り手と受け手が同じ空間にいることが第一の要件。映画館などとは異なる点。
- ・作り手（舞台）と受け手（観客）の位置関係から劇場の種類が変わる。舞台と客席が仕切られていないオープン舞台の劇場。舞台と客席空間とが分かれているプロセニウム型の劇場。
- ・クラシック演奏のためのホールは、基本的にオープン舞台の劇場。舞台と聴衆が同じ空間にいるシングルルーム型。
- ・プロセニウム型の劇場は、オペラや演劇だけでなく、多様な上演芸術や集会場などにも有効な機能を発揮する舞台形式として発達してきた。
- ・自館のホールの空席時、満席時の残響時間は知っておいてほしい。
- ・音響反射板は、プロセニウム型を疑似的にワンボックス型の劇場に変えるためのもの。
- ・劇場を俯瞰。単なる知識ではなく、なんのために何があって、なんのためにどうしているということを考えるスタートとしてほしい。

講義Ⅱ 平成26年度劇場・音楽堂等人材養成講座テキスト基礎編より「第5章 舞台設備とは」

講師 鈴木輝一 ((株)ピー・フォー 代表取締役)

- ・床機構は日本でも古くから発達し、廻り舞台は日本人が世界で初めて考案したと言われている。
- ・水平幕は機構の一部。もともと舞台正面に設置された大壁面の機構設備であった。
- ・黒幕類である舞台転換用の幕（暗転幕、中割幕、大黒幕）と見切りを隠す黒幕（袖幕、一文字幕）は、観客席から黒い幕が見えていたとしても歌舞伎の黒子と同じで「何も無い」という意味合いを表している。

- ・ 舞台照明は、空間構成に加えて時間構成をデザインすることができるようになった。
- ・ LED 灯具は、調光や色の制御の部分でまだ技術的な改良を要する。
- ・ 電気音響（PA）は、音波を捉え、音声信号へ変換し、再び音波として届けられる。この原理は昔から変わらない。
- ・ プロジェクターの性能は、ANSI ルーメンで表現する。解像度は画素の密度を示す数値で、密度が高いほど高画質である。

講義Ⅲ「公立文化施設の危機管理」～自然災害、事故防止、テロ対策～

講師 本間基照（(株)インターリスク総研 マネジャー・上席コンサルタント）

- ・ 広域型地震、直下型地震のどちらが考えられるか知ることが必要。行政のハザードマップなどを活用する。
- ・ インフラ被害の復旧は、電気は3日間ぐらい、水道は1週間程度、ガスは1ヶ月。電気は送電ルートが複数ある。水道は物理的な水道管の修復が必要。ガスは検査が必要。通信は3日間ぐらいつながりにくい。
- ・ 建物に耐震性があれば、外に逃げない方が安全。

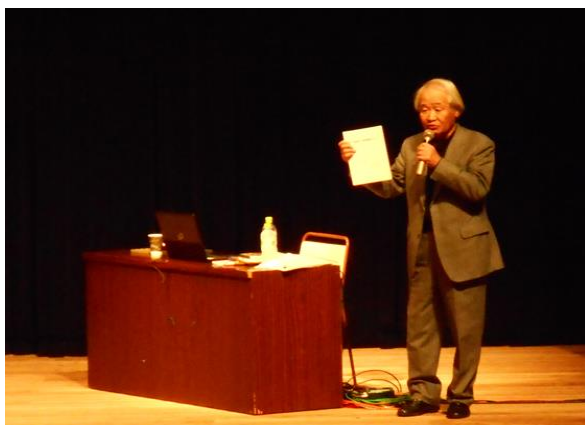
演習 1

地震発生後の対応として想定される事案を1グループ4～5名に分かれ、グループワークで話し合った。

- ・ 災害時要援護者への対応
- ・ 応急手当を実施することは、たとえ結果が悪くてもそこに悪意や重大な過失がなければ責任を問われることはない。自らが行うことが可能な応急手当を怠った場合には、法的責任を問われることがある。
- ・ 事故が発生した場合、ケガ人への対応と施設（組織）としての対応を考える。

演習 2

扉の事故でケガをした負傷者への対応についてグループワークで話し合った。



講義Ⅰ・Ⅱ



講義Ⅲ

3 研修を終えて

劇場・音楽堂等人材養成講座の「第4章 劇場空間とは」と「第5章 舞台設備とは」の内容については、劇場・音楽堂等で働くすべての人材が身につけておくべき基礎的な事柄であることから、参加者からは「改めて知識の再確認ができた。」「浅い知識でしかなかったものを補完し、習得することができた。」などの声を聞くことができた。

公立文化施設の危機管理の講義については、グループワークでの討議があったことで、参加者間での意見交換が活発に行われていた。その意見のやり取りの中で他館との対応の違いを認識し、気づきや新しい知識の習得につながっていた。

どちらの講義についても時間の余裕がなく、資料映像を見る時間、討議をする時間が若干足りなかった。研修の中身についてはもちろんのこと、時間配分についても受講者の皆さんに満足して頂ける研修を企画できるよう努めたい。

